

神奈川県立柏陽高等学校における学校運営協議会 開催結果

本校の学校運営協議会を次のとおりに開催した。

審議会等名称	神奈川県立柏陽高等学校 令和7年度 第2回学校運営協議会（進路指導部会）
開催日時	令和7年11月26日（水） 14:00～15:30
開催場所	神奈川県立柏陽高等学校 大教室
出席者	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 15%;"> <p>[役職名]</p> <p>出席者</p> </div> <div style="width: 85%;"> <p>[委員] 川口 吉秋（会長、元県立高等学校長）</p> <p>田中 均（柏陽高等学校同窓会 柏樹会会長）</p> <p>中西 亮（柏陽高等学校 PTA 会長）</p> <p>會田 勉（柏陽高等学校長）</p> <p>[事務局] 水戸 瑞樹（総括教諭）、市田 尚史（総括教諭）、目黒 梓（総括教諭）、竹田 慎（教諭）</p> </div> </div>

～開会～

1 冒頭あいさつ（全体会）

副校長：全体の流れの確認（次第）2つの部会を同時に開催する。ご理解いただきたい。

校長：本校は安定を求めず、変化していく必要がある。柏陽高校はまだ歴史が浅いため、努力する必要がある。

外から見た柏陽高校について、忌憚なき厳しい意見をぜひいただきたい。

副校長：15:15より全体共有する。

2 学校設置部会「進路指導部会」について

・資料の内容説明を受けて

中西：保護者の立場として、模試の成績がいい要因を教えてほしい。このまま継続できることであれば続けてもらいたい。また、3年生の登校状況を知りたい。

目黒：コロナ禍が終わった段階で入学したことが要因の1つではないか。多くの生徒は来ていて、この時期は来ていない生徒も出ている状況。周りの生徒たちから来るように促してもらっている。

中西：来ている生徒と来ていない生徒で、進学に影響しているか。

市田：データを分析したところ、休めば休むほど合格率は下がる傾向は見えてとれる。ただし、データ数が少ないので、もっと増えてから生徒に数値のデータを伝える。口頭では伝えている。

校長：先日の首都圏英語ディベート大会では、2年連続で優勝した。本校の生徒は力強く、出場していない生徒も床に座ってメモを取る様子があり、頑張っていた。

田中：これまでの積み上げにより、10年間で大きくよくなっている。英語のディベートで優勝していることは柏陽高校の強味で、学校説明会で積極的にアピールしてほしい。SSHも検討されたいかがか。総合的な探究の時間での取組がよくなっているのも、SSHの下地ができていないのか。

水戸：総合的な探究の時間は、1年生では前期で「万博を横浜で誘致すべきか」をテーマにディベートを行った。後期では紙コプターの実験検証をしている。2年生はグループに分かれて実施。駅前でのインタビューや柏陽生に対してアンケート等を行っている。

田中：ポスターセッションを英語で行わせるのはどうか。柏陽生にはその力がある。もちろん日本語でもいいが、英語を使う機会を多くすることが重要ではないか。

目黒：学校全体でディベート大会をしているので、全員ディベートができる。2年生は4月からディベートをしているため、説得の方法を考えたり、次のステップを考えたりすることができる。

川口：2年前にポスターセッションを英語で行うのはどうかという問いかけに対して「今は日本語でしっかりと行うことが重要」という回答だった。現在はそこから大きく成長している。県で導入された採点システムの百問繚乱でテストの形はどのように変わるのか。思考力や判断力がつかないのではないか。

竹田：問い方によって、思考力や判断力を問うことができる。

目黒：テストについては、知識を問う問題になっている。

水戸：記述式の回答。川口先生が以前話していたことで、採点をしながら生徒がどこを間違っているかを確認でき、弱点も把握できる。マークはデータ化することで細かい分析を行うことには有効である。

市田：採点はマークと記述の両方。デジタルだと一括で処理ができるのでミスが少なく、効率がいい。

川口：デジタルでは生徒の顔が見えないので、ちょっとした変化を見ることが難しい。冒頭で、校長から忌憚のない意見とあったが、校長が着任してから気になっている点はあるか。

校長：生徒に関しては、穏やかで真面目な生徒が多い。逆に尖った生徒が少ない。ただし、尖った生徒をつくりたいわけではなく、そういう生徒たちが国公立大学を目指すことが本校の目指す方向と合っている。教員の業務はハードな印象だ。65分の充実した授業をつくることは大変なことだ。

田中：授業内でやる気を続ける工夫がされているのか。指定校推薦の生徒が少ないことから、安易に流れないような指導をしていることが伝わる。

市田：指定校推薦を取るほうが難しいという指導を行っている。指定校推薦をもらうことができる生徒はそのまま受験しても合格できるように指導している。

3 全体共有

細田：柏陽高校を地域にどうやって広めるか、うまく利用するかが課題である。柏陽高校と本郷中学校は連携できているが、他の中学校とのつながりがほとんどない。住民と協力してさまざまなことができればと思う。防災訓練に関して、協力できるところをつくっていきたい。

佐藤：地域防災訓練に参加していただきたい旨を伝えた。災害が起きた時に地域を救う協力者となってほしい。

湊：近隣にお住まいの高齢者や病院等と協力して、本郷中学校と柏陽高校の生徒が人を助けてほしい。柏陽高校の吹奏楽部に刺激を受けて、今年全国大会に行くことができた。地域のコンサート等に柏陽高校が参加すると盛り上がる。連携していきたい。常にアップデートを行っていることに感銘を受けた。

中西：進路指導に関して、保護者の視点から指摘させていただいた。指導の秘訣や教員が新しい授業を行っている積極的な取組を聞いて感謝している。学校に通うことの重要性を聞いてよかった。

田中：10年間見てきて、組織力、チーム力、指導力、技術力が上がっていると感じる。職員にも活気が感じられる。さまざまな指導において、急にレベルアップすることは難しいが、確実に上がっていることをもっと周知してほしい。さらに言えば、SSHやSGH等を引き受けてほしい。

川口：年々先生方や生徒たちの言葉の力が感じられる。以前の会議では「それは難しい」という発言もあった。さまざまなシステムも導入されて大変だが、それを追い越して実績をつくり、先駆者になってほしい。

4 事務局より

副校長：さまざまな貴重な意見をいただいた。今後の学校運営に活かしていきたい。次回は令和8年3月の予定である。

～閉会～

主な会議資料	・ 次第、座席表 ・ 進路指導部会資料（進路指導グループ） ・ 研究・広報グループの取組について ・ 教務・学習Gの取組について ・ 授業評価アンケート結果
問合せ先	県立柏陽高等学校 副校長 小野 亜希子 電話番号 045(892)2106